



### 博物館資料の紹介 「自然銅」

最初は「クロム鉱」と記されていたらしい、かなり貴重な資料です。

鉱業が盛んだった日高地域で、最も盛んに採掘されたものは、真っ黒でずっしり重いクロム鉄鉱です。クロム鉄鉱は、河原にも円磨された状態で散乱しています。

博物館の展示資料の自然銅は、廃校となった千栄中学校に「クロム鉱」（クロムを含む鉱石の総称であるクロム鉱のこと。クロム鉱のうち、主要で代表的なものがクロム鉄鉱）として収蔵されていたそうです。周辺にはクロム鉱山が多く、採取された方が、辺りに散乱しているクロム鉄鉱の変わりものだと判断されたのかもしれませんが。

資料に目を移すと、この形状・大きさであればまず、熔融して固める等の工程でできた人工物と疑われます。実際、人工的な熔融を経たであろう鉱滓が円磨されたものは、日高管内ではよく見られますが、この資料は、電子顕微鏡下での鉱物の重なり方や、結晶の形、熔融したものであれば消えてしまう鉱物が存在することから、人工物ではなく自然物、自然銅の塊であると科学的に証明されました。このような形・大きさの自然銅は大変珍しいものです。

銅は、地下深くのマグマから出る熱水や蒸気によって形成される鉱床などでよく産出します。一方、蛇紋岩を伴って産出される場合もあります。日高は蛇紋岩が多く、それに伴ってクロム鉄鉱も産出されていました。両方が産出されるということは、日高の地質はどのようにしてできたのかなど、日高の地域の成り立ちを考える上でも重要な資料となってきます。

生活で利用されている鉱石は、周辺の地質の研究試料としても有用で、その地域での生活と土地柄・地質を結び付けるものとして、かけがえのない価値があります。なお、資料を全て10円玉に加工すると何枚できるのか等、値段について聞かれることが多いですが、謎にしておきます。



自然銅の表面。孔雀石(緑色)などが見られます。(10円玉はスケール)



自然銅の断面。銅はやわらかく、岩石カッターでうまく切れないことがあります。



参考資料として、沙流川にて採取したクロム鉄鉱です。